

外国人保護者の持つ育児コミュニティへの参入意識

山下順子・成利楽・渡部倫子

Perception of Foreign Parents' Participation in the Child-Rearing Community in Japan

Junko YAMASHITA, Li-Le CHENG, Tomoko WATANABE

キーワード：外国人保護者、育児コミュニティ、コミュニティ参入意識、中国人保護者、多文化共生

1. はじめに

文部科学省（2020）が公表した「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入状況等に関する調査」によれば、2019 年度において日本語指導が必要とされる児童生徒は 5 万人以上にのぼり、外国にルーツのある児童生徒に対する日本語支援に関して活発な議論がなされている。加えて、外国人児童生徒への支援ガイドブック（齋藤, 2011）をはじめとした参考書の刊行や、CLARINET（海外子女教育、帰国・外国人児童生徒教育等に関するホームページ）の設立、自治体を主体とした教育施策の提案（小島, 2021）など、外国人児童生徒への支援や政策に広がりを見せている。

その一方で、外国人児童生徒の保護者には十分に目が向けられているとは言い難い。外国人児童生徒の保護者の多くが日本語を母語とせず、また、保護者であるがゆえに、子どものように日本語学習支援を受ける機会も少ない。そのため、言語による壁を乗り越えて、行政や教育に関する情報を自ら収集しなければならない。また、自身の生まれ育った故郷を離れて、文化や社会環境も異なる日本で生活・育児をすることの大変さは想像に難くない。それにも関わらず、外国人保護者への支援、特に日本での育児に関する言語以外の支援を目的とした研究は十分になされているとは言い難い。

そこで本稿は、外国人児童生徒の保護者を対象とした調査を行う。次節で詳細に説明するが、日本語教育支援の必要性についてはいくつかの先行研究で提言が得られている。しかし、地域社会参画の観点からは、言語的な支援だけでなく、外国人保護者がどのようなコミュニティに関わっており、そのコミュニティに対してどのような意識を持っているのかを明らかにする必

要がある。外国人児童生徒およびその保護者にまつわる支援や対策については、学校教育レベルではなく社会全体の課題として見直し、その支援の方法について示唆を得ることが喫緊の課題であると言える。そこで本稿は、法務省（2020）が公開した在留外国人統計において、在留外国人として最も人数の多い国籍である中国の保護者を対象に、彼らが育児のために関わっているコミュニティとそれに対する意識を明らかにする。

なお、本稿におけるコミュニティという用語について、Delanty（2003, 山内・伊藤訳, 2006 ; p76）は、基本的なコミュニティは、近隣社会など相互依存と共通の生活形態を基礎にする、比較的集団と関連があるものであると示している。また、そのコミュニティが小規模な集団であっても、共通の経験・言葉、親族的な絆、空間などを共有する生活世界における居住に基づく帰属感覚の基盤になっていると言われている。高・末永・宮本（2021）は Delanty の定義に基づき、育児コミュニティを「子育てという共通の関心を持った 2 人以上の集まり」と定義した。本研究は高・末永・宮本の定義を参考にし、育児コミュニティを「外国人児童生徒の保護者が関わる子育てに共通の関心を持った 2 人以上の集まり」とする。

2. 先行研究

外国人児童生徒の保護者を対象とした研究は、日本語教育の視点からなされたものが多い。外国人保護者に調査を行った林（2017）は、子育てに関する手助けで望むこととして、学校からの連絡書類の翻訳、通訳者の常駐などを希望していることを報告している。杉本・樋口（2020）も、幼稚園・保育所の先生との日本

語でのコミュニケーション（書類や手紙を書く、懇談会、連絡帳への記入など）に困難を抱えていることが明らかになり、外国人保護者の社会参画を実現するために、保育園の保育者や他の保護者と無理なくやりとりができる日本語能力を習得する必要があると主張している。さらに和田上・乙訓・松田・渡辺・高橋・三浦・廣瀬・長谷川・高橋・高橋・高橋（2018）は、外国人児童生徒およびその保護者に接する経験がある保育士に調査を行い、保護者との意思伝達に戸惑いを感じていること、話す言葉や伝え方を工夫しながら意思伝達を図っていることを明らかにした。このように、日本語がコミュニケーション上の障壁となり意思疎通に支障をきたすことは容易に想像できるため、言語面に特化した研究が優先的になされるのは至極当然のことであろう。

外国人保護者のコミュニティについて考察している研究もいくつか存在する。例えば濱村・狩野・三島・永島（2004）は、フィリピン人の母親が感じる育児ストレスについて調査しており、日本人など周囲の人々とのコミュニケーション、また父親や家族からのサポートが重要であることを主張している。また、和田上・乙訓・松田・渡辺・高橋・三浦・長谷川・廣瀬・鶴田・高橋・高橋・高橋・井出（2019）では、保育所の利用経験がある外国人保護者3名へのインタビューデータから、同じ出身国の保護者とのネットワークを形成し、それを活用しながら育児をこなしていることが報告されている。さらに、相磯（2014）のインタビューデータから、フィリピン出身の保護者は、同国出身の保護者同士でネットワークを構築しており、幼稚園文書（特に漢字）の理解などで助け合っている様子が記述されている。そのほかにも、コミュニティセンターの日本語教室の教師に依頼するケースも見られ、コミュニティセンターの支援が役に立っていることも述べられている。

このように、外国人保護者の保育・育児に関するコミュニティは、同じ出身国の保護者とのネットワーク、また日本語支援を受けられるコミュニティセンターなどが一般的のようである。しかし、これらのコミュニティに対してどのような態度で持って参入しているのか、また当該コミュニティに対して外国人保護者がどのような意識や態度を抱いているかという、コミュニティに対する外国人保護者の意識にまで踏み込んだ調査は行われていない。

そこで本研究では、幼稚園の職員や、子どもと同じ組の日本人保護者、同じ出身国の保護者、そして職場の同僚など、日本で育児を行うに当たって触れ合うであ

ろうコミュニティ別に、外国人保護者がどの程度参入しているのか、またそれらに対してどのような意識をもって参入しているのかを明らかにすることを目的とする。

3. 調査概要

Q市の幼稚園に子どもを通わせている中国人保護者3名を対象に、個別に半構造化インタビューを実施した。インタビューは、2020年1月中旬に実施した。半構造化インタビューではまず、調査協力者に関する背景情報（来日時期、来日理由、保護者自身の日本語能力、家庭内の使用言語、子どもの年齢、幼稚園の様子、職場）を尋ねた。その後、（1）日本で子育てをしていて、日常的に関わっている人やグループはありますか。ある場合、どの程度関わっていますか、あるいは関わっていききたいと思いますか、（2）日本で子育てをしている時、困った経験や戸惑った経験はありますか。ある場合、誰に相談したり助けを求めたりしますか、という質問を投げかけ、調査協力者の返答に応じて適宜追加の質問を行った。

インタビューは広島大学大学院に在籍している中国語留学生（超級日本語学習者、日本語能力試験1級取得）であった。インタビューは、調査協力者の母語である中国語で実施した。協力者の許可を得てインタビューの内容を録音し、データを書き起こした後に日本語の翻訳を行った。

表1 調査協力者の背景情報

	A	B	C
来日時期	2003年	2011年	2012年
来日理由	留学・就職	結婚	結婚
日本語能力	上級 (N1取得)	中級	中級
家庭内 使用言語	夫：中国語 子：日本語	中国語	夫：中国語 子：日中両方
子の年齢	5歳6ヶ月 15ヶ月	6歳	5歳6ヶ月 4歳3ヶ月
幼稚園	X幼稚園	Y幼稚園	X幼稚園
職場	介護関係	介護関係	製造業

調査協力者の概要は表1の通りである。Aは大学進

学のために来日し、日本でも就職しているため、日本語能力は高い。一方、BとCは、結婚を機に来日しており、日常会話における日本語は中級程度である。ここで言う中級程度は、相手の日本語が聞き取れ言いたいこともある程度伝えられるものの、語彙や表現に不自然さが残る程度を指す。どの協力者も、家庭内で使用する言語は中国語が中心であるが、AとBの場合は、日本語で子どもとコミュニケーションをとることもある。子どもの通う幼稚園は、AとCの2名はX幼稚園、BはY幼稚園に子どもを通わせている。X幼稚園、Y幼稚園には日本人の児童も多く在籍している。

4. 結果と考察

調査協力者に行ったインタビューの回答から、日本での育児に関して日常的に関わっている人やグループは、①幼稚園職員、②日本人保護者、③職場の同僚、④中国人保護者の4つであることが分かった。そのため、次節では、調査協力者のインタビュー回答データから、これら4つのコミュニティに対する参入の程度や参入意識を述べる。

4.1 幼稚園職員

幼稚園職員とのコミュニケーションは、X幼稚園とY幼稚園で違いがあった。AとCが通うX幼稚園では、スマートフォンのアプリケーションを活用した情報伝達だけでなく、幼稚園の職員とのコミュニケーションも密に行われていることが窺え、幼稚園側の対応や支援に満足していることが分かる。

C: 学校からの情報は全部スマホで確認するし、子どもを迎えに行くときに少し先生とおしゃべりする。今日のピアノの練習、頑張っていましたよ。トイレが我慢できない子に「さきにどうぞ」と言って、列の最後に並んでいました」と言った褒め言葉が多くて嬉しい。

A: 私の娘が幼稚園に行きたくない時期があった。それで、先生に幼稚園で何かあったか確認したら、その先生はわざわざ周りの人に確かめてくれた。そして「幼稚園では他の子ども仲良くしているし、仲間はずれにもされていない、どこかが痛いとかも言わない」と教えてくれた。私が、娘が家にいるときは「お腹が痛い」とよく言うのと伝えたら、幼稚園の先生は「もしかしたら心理的なことが原因かもしれない。もっと（娘）ちゃんに気を配ったほうがいいい」とも教えてくれた。職員との連絡に関しては満足している。

一方、Y幼稚園に子どもを通わせているBの場合、幼稚園の職員とのコミュニケーションは連絡帳での伝達事項のみに限られていることに対し不満を抱いているようである。

B: (先生との連絡には) 連絡帳を使っているだけ。中国だったら「（娘）ちゃんは最近...」と具体的な内容を教えてくれるんだけど、今の幼稚園は言ってくれない。だからコミュニケーションも難しい。一度、（娘が）文化の違いで何か理解できなかったり、先生の言うことが分からなかったりするかを先生に相談したが、先生はすぐに「ないと思います」と答えた。(中略) 表面的なやりとりが多いので、聞いても「問題ない」としか答えてくれないから聞かなくなった。子どもの詳しい様子を知りたくても、返事が大体予測できるので今はもう聞かない。

B: (「お子さんの様子がいつもと違うとき、幼稚園に連絡しますか」という質問に対して) 言わない。幼稚園からの連絡に情緒に関する内容はない。例えば、幼稚園で怒ったり、泣いたりしても保護者には報告しない。出来事のみ。(中略) 先生自ら言ってくれない、隣に立っていても声をかけてくれないし。子どもが幼稚園にいたときの様子を私に伝えようとしてくれない。私の日本語が下手だと思われているからかもしれないね。そこまで下手ではないと思うけど、日常会話ぐらいなら大丈夫だよ。子どもの幼稚園での出来事、面白いことを日本人の保護者には伝えるけど、私には声をかけてくれない。やはり親としては知りたい。

このように、X幼稚園とY幼稚園の情報伝達の違いや職員の対応によって、外国人保護者が職員に感じる印象が大きく異なることが窺える。自身の子どもの幼稚園でどのように過ごしているのかを詳細に伝えること、また幼稚園での子どもの様子に関して保護者が疑問を抱いた時に、職員が積極的に対応し、コミュニケーションを図ろうとしているかという姿勢が原因となっていることが分かる。

Bは、Y幼稚園が十分な情報を提供してくれないという現状から、職員と積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度を失っていることが分かる。子を持つ親として、幼稚園で子どもがどのように過ごしたかを知りたい、またいつもと様子の違う子どもに対してどう接するべきかを知りたい、このような育児に関する悩みに対して真摯に向き合ってくれているかによって、幼稚園職員とのコミュニケーション意欲の度合い

が左右されることを示唆している。

4.2 日本人保護者

X 幼稚園および Y 幼稚園には日本人の子どもも通っているため、クラスメートの保護者の多くは日本人保護者である。日本人保護者に対してどのような関わり合いをしているか、また日本人保護者のコミュニティへの参入意識についても質問した。

A や B のインタビューデータから、日本人とは挨拶レベルでの付き合いしかしておらず、そのような現状を変えようとする積極的な姿勢も見られないことが分かった。その理由として、表面的な付き合いの方が気が楽であること、共通の話題もなくコミュニティに参入する必要性を感じないという気持ちを持っていることが窺える。また、B や C の場合、言語的な問題も積極的な参入を阻む理由の一つになっているようである。

A: 日本人の保護者と関係を作る意欲はない。今のネットワークに十分満足している。日本での生活はちゃんと秩序にそって行動すればいいので、深く付き合ってもあまり生活に役立たないし、浅いほうが気が楽だし負担にならない。挨拶レベルぐらいならするんだけど、家のことなどに関してはちょっと。しかも、日本人は個人情報保護の意識が高いので、「うちに遊びに来てね」とかは言わない。だから、私もできれば日本人の保護者と深い関わりを持たないように心がけている。

B: 懇談会でも積極的に日本人の保護者に声かけようとしな。共通の話題や趣味がないと思うから。（中略）懇談会で全員に一人ずつ発言させるんですね。発言の内容は、基本的に「私は～の親です。どうぞよろしくお願いします。」という挨拶レベルのものですね。実際、全員発言し終わったら誰が誰かなんて覚えていない。実質的な内容はない。

（「もし日本人のお母さんたちと一緒に食事したり、何かしたりする機会があったら、C さんは参加したいと思いますか」という質問に対して）行かない。行く必要性を感じないから。何か問題があったら日本人の保護者よりも先生に聞いたほうが気が楽だし。（中略）自分の日本語も上手じゃないし、迷惑ばかりかけちゃうかも。意識的に関わらないようにしている。

C: （「日本人の保護者と仲よくなりたい、日本人のお母さんたちのネットワークに入りたいと思ったことがありますか」という質問に対して）意欲は全くない。できるだけ、日本人の保護者と関わらないようにしてい

る。言語の問題もあるし。

このように、3 人とも積極的なコミュニティ参入を避け、表面的な付き合いにとどめておこうとする意識を持っていることが分かった。その意識の背景には、日本人保護者同士の付き合い方が影響している可能性もある。B や C の発話から、日本人保護者同士の関係を観察した上で、自身の立ち回りを考えていることが窺える。

B: （「日本人の保護者と仲よくなりたい、日本人のお母さんたちのネットワークに入りたいと思ったことがありますか」という質問に対して）ない。今の状態でいいと思っている。日本人の人たちも、たいてい表面的な付き合いだろう。

C: 幼稚園の保護者の LINE グループがある。誘われて入ったが、発言する人があまりいないことに気づいた。日本人もあまり連絡取れていないような気がした。日本人の保護者と話したいことがない。声かけられた場合は、聞かれた内容を答えるだけ。おしゃべりはしない。日本人でさえ深く関わらないのに、私も彼らと関わろうとは思わない。

ただし、日本語能力が高く日本滞在歴も長い A は、日本人保護者に会った時には挨拶を欠かさないことを述べている。たとえ表面的な関係であったとしても、日本人保護者と友好的な関係を維持していきたいという意識が A にはあるようだ。A は日本語能力が高いことから、その関係づくりをうまく遂行できていることが読み取れる。

A: 送迎する時は必ず（日本人の保護者に）挨拶する。私の性格もあると思うけど、向こうが私に挨拶をする様子がなくても、必ず挨拶をする。外国人としての自覚かもしれないけど、挨拶をしないと「中国人は失礼だ」というふうに思われちゃうかもしれないで。

4.3 職場の同僚

A と B は同じ職場に勤めており、育児に関して職場の同僚に相談することもあると回答した。C は自身の日本語能力や職場環境の影響で、職場にいる日本人との関わりが少ないと答えた。どういう時に職場の同僚に意見を求めるかと尋ねたところ、B は家族や中国人保護者のコミュニティの力では解決できないような課

題がある時に、職場にいる日本人保護者に助言を求めることがあると述べた。

B: どうしても回答が見つからない場合は、職場の日本人のお母さんに聞きます。例えば、彼女の子どもは10歳です。彼女に「子どもが反抗期になったときに親がどのように対処したらいいか」を聞いてみた。やはり私はその辺について結構気になっていた。そしたら、彼女が「人によって対処の仕方が違うかもしれないけど、わざと子どもの一部の問題を無視したりする。多めに見たり、課題を抱えている子どもことを受け入れたり、そして、子どもと一緒にこの時期を乗り越えていく。子どもと対抗しないようにする」と教えてくれた。

A は日本人保護者に相談を求める目的は、課題解決よりも、自分の育児方法に不安を感じているため、日本人保護者から育児情報を得られることでの安心感、共感し合えるという安心感の獲得が狙いであると言える。

A: 例えば「うちの子にこれを習わせたいですが、お子さんもこれを勉強していますか」とか。「うちの子は最近こんな状態なんだけど、あなたの子が同じ時期にもこんなことが起こりましたか」とか。その同僚から「うちの子もそんな状態があったよ」と教えてくれたので、安心した。そうすると、(私も) 子どもの教育に対して厳しすぎないように気をつけることができる。

このように、中国人保護者は育児について、意見を求めたい、そして、安心感を得るために職場の日本人保護者に助けを求めることがわかる。

4.4 中国人保護者

育児について他の中国人保護者に相談を求めた経験があるかという質問には、3名ともあると答えた。B は育児の本やインターネットで入手した情報を知り合いの中国人保護者に共有したり、助言をしたりすることも少なくないと回答した。そして、B は Q 市で中国人の子どもを対象に中国語教室を運営している。中国人保護者の育児コミュニティの参加者という立場だけでなく、創出者と言っても良いだろう。

A は、子どもの通っている幼稚園の行事が少なく、保護者としてあまり負担を感じていないと思っている一方、1年後に子どもが小学生になることから学校行事が増加することを懸念している。しかし、学校行事

への対応をはじめとした経験が不十分で、これからの育児に対して不安を抱えていると述べた。その不安を軽減するために、周りにいる小学生の子どもを持つ中国人保護者からの情報提供を期待している。

A: やはり他の(中国人)保護者からアドバイスが欲しい。わたしは子育てにあまり力を入れていないから、全て幼稚園に任せているような感じ。(中略)今のままでもいいけど、娘が小学生になったら、運動会やら、見学日やら、家庭訪問やら、いろんなイベントが増えると思う。その時になると、対応できるかどうか心配だ。

C は、中国人の保護者の集まりへの参加意欲を示したが、そのようなコミュニティが周りにないと回答した。しかし、Q 市には中国人児童生徒が多く在住しているため、中国人保護者の数も少なくないと予想できる。加えて、C の子どもが通っている中国語教室にも中国人保護者のコミュニティが存在している。そのような中でコミュニティの存在を認知できていない原因について、C の家庭内環境からの影響が考えられる。C の夫(中国人)は長年日本の会社に勤めており、日本語能力が堪能である。C はたまに同じクラスにいる中国人の子どもの保護者に意見を求めることもあるが、夫が積極的に育児に関わっているため、育児に関する悩みがある時に、夫と相談することが多いと回答した。

C: もし中国人の保護者の集まりがあったらいいな。しかし、今の保育園には中国人の子どもが3人しかいない。人数も少ないし、みんな忙しくて、集まる時間がなさそう。平日は仕事、週末になったら、子どもの習い事や別のことで忙しいし。子どもの習い事に関しては色々悩んでいたから、同じクラスの子の中国人の親に聞いたことがあるくらい。私よりも夫の方が日本語ができるので、彼がよく幼稚園の活動に参加していた。

一方、子育てのコミュニティの構築に積極的な姿勢を示すBの話によると、夫が子育てにあまり関与していないため、夫と相談ことも少なく、自分で本を読んだり、職場の日本人保護者に尋ねたりすると回答した。このように、中国人保護者のコミュニティに対する意識は、それぞれの保護者が持っている育児に関する知識や経験の多寡、そして、家庭内の育児分担などによっても異なることがわかる。

以上をまとめると、コミュニティに属する人々との関係の深さや期待度によって、参加しようとする態度や姿勢が異なることが分かった。幼稚園職員の場合は、

幼稚園の情報伝達の違いや保護者への職員の対応によって、幼稚園職員とのコミュニケーション意欲の度合いが左右されることを示唆している。X 幼稚園では、アプリを活用した細かな情報提供や職員との密なやりとりによって両者の関係が満足するレベルに保たれていた一方、B のように幼稚園での子どもの様子を尋ねても十分な返答が得られない場合、園や職員に対する期待が下がり、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度を失う可能性があることが示唆される。

日本人保護者の場合、保護者とは挨拶レベルでの付き合いしかしていないが、積極的なコミュニティ参入の姿勢も見られない。共通の話題もなく表面的な付き合いの方が気楽であること、懇親会などの交流機会があっても表面的なやりとりで終始してしまうことから、高い参入意識が得られないようである。

職場の同僚に関しては、育児による繋がり以前に職場の仲間としての関係が構築されていること、そして同僚に育児経験のある人がいる場合に、先輩・後輩という立場で育児の悩みを相談し、安心感を得られるような環境が整っていることが分かる。

中国人保護者については、同郷の仲間として、同じ境遇にいる中国人保護者からの情報提供を期待していることから、積極的にコミュニティに参入したいという意識がある。ただし、それぞれの保護者が持っている育児に関する知識や経験の多寡、そして、家庭内の育児分担などによっても参入の度合いが異なっているようである。

5. おわりに

本稿は、Q市の幼稚園に子どもを通わせている中国人保護者3名を対象にインタビューを行い、育児に関するコミュニティに対してどのような意識や態度を抱いているかを調査した。その結果、コミュニティに属する人々との関係の深さや期待度によって、参加しようとする態度や姿勢が異なることが分かった。

日本人保護者に対しては、共通の話題もなく表面的な付き合いしかしていないためコミュニティ参入意欲をほとんど感じていないようである。しかし、幼稚園職員や職場の同僚に対しては、育児の悩み相談に親身になって対応し、先輩という立場から十分な情報を提供してくれることから好意的な印象を抱いていることが分かる。つまり、毎日顔を合わせる間柄であっても、表面的な会話だけで深い関係を築く機会がなければ、コミュニティへの参入意識は高まりにくいと考えられる。また、育児に関する十分な情報提供が期待できな

いような場合も、参入意識が低下すると考えられる。

現在、外国人児童生徒に対する支援や教育施策が広がっているが、子どもの教育を豊かにするためには、単に人だけではなく、家庭という単位での地域社会への参画が必要不可欠である。例えば田村（2020）は、多文化共生時代に向けて「外国人同士が集う場や、日本人住民との交流の場を創出し、「個」としての外国人支援から「面」としてのコミュニティ支援へ視点を広げる」ことの必要性を主張している。彼らを同じ日本社会に属する住民として認識し、日本人保護者と同じように育児や教育に関係する支援を提供すること、また悩みを相談できるような関係づくりの場を創出することが日本社会に求められている。

また佐々木（2021）は、外国人保育士を登用した保育園の事例から、彼らは外国人児童に対して言語のみならず文化的習慣に対しても理解・支援できる重要な役割となることを主張している。外国人児童やその保護者との関わり合いを密に行える存在が教育現場にいることは、外国人保護者と幼稚園側の関係構築にとどまらず、日本人保護者の外国人児童生徒・保護者に対する理解力も高まることが期待される。田村（2012）でも、外国人という強みを活かしたアウトドアビジネス事業や人材育成など、外国人コミュニティとの共生に向けた地域施策が提言されている。

本調査の結果から、外国人保護者への支援が、幼稚園などの学校レベルではなく社会全体として捉えるべき課題であることが改めて提示されたとともに、外国人保護者との関わり方が彼らのコミュニティ参入意識に影響を及ぼし得ることを幼稚園職員や日本人保護者にも認識させる必要性が示唆された。今後、日本全国で在住外国人数が増加することが予想される。これに伴い、外国人児童生徒を抱える保護者への支援もますます重要になると考えられる。多文化共生を実現するためにも、外国人児童生徒のみならず保護者にも支援の光が向けられることを期待する。

今後の課題は、以下の2点である。まず、対象者が中国籍の外国人保護者のみであった点である。国籍や宗教、また教育機関によっても育児に対するニーズやコミュニティ参入への考え方が異なる可能性がある。今後は、多様な文化的背景を持つ保護者を対象にコミュニティ参入意識を調査することが求められる。2点目は、コミュニティ参入の程度の是非を論じられなかった点である。本研究の結果、外国人保護者の育児コミュニティに対する意識や態度が明らかになったものの、それがどのくらい高ければ良いのか、また積極的なコミュニティ参入がそもそも必要であるかについて

は結論を提示することができない。これについては、幼稚園職員や日本人保護者にも調査を行い、相互の意見を参考にしながら、理想的なコミュニティ参入の程度を確かめることが課題だと言える。

謝辞：お忙しい中、本調査へのご協力をご快諾いただいた3名の中国人保護者に心より感謝申し上げます。

参考文献

相磯友子（2014）「日本の幼稚園における外国人保護者同士のネットワーク ―外国人保護者へのインタビュー調査から―」『植草学園短期大学研究紀要』第15号、11-20.

小島祥美（2021）「外国籍の子どもの不就学ゼロに向けた教育支援の在り方 ―「誰ひとり取り残さない」ために自治体ができる教育施策の提案―」『都市とガバナンス』第35号、28-36.

齋藤ひろみ編（2011）『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』凡人社

佐々木由美子（2021）「外国籍保育士の登用による成果」『都市とガバナンス』第35号、50-55.

杉本香・樋口尊子（2020）「外国人保護者が社会参加するための日本語教育支援を考える：外国人保護者へのアンケート調査の結果から」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第10巻、1-12.

高綾子・末永由理・宮本千津子（2021）「潜在看護師の復職及び就業継続における子育てに関するコミュニティの関与」『日本看護管理学会誌』第25号、151-160.

田村太郎（2012）「外国人住民とともに築く地域の未来～多文化共生時代における日本語教育の役割～」『文化庁 平成24年度日本語教育大会特別講演』
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/taikai/24/program/pdf/tamura.pdf（閲覧日：2021年11月22日）

田村太郎（2020）「外国人コミュニティと共生施策について」『法務省出入国在留管理庁 令和2年度「国民の声」を聴く会』
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001338409.pdf>（閲覧日：2021年11月22日）

Delanty, G. (2003) : Community. Routledge. ジェラード・ディランティ著、山内靖・伊藤茂訳（2006）『コミュニティーグローバル化と社会理論の変容』NTT出版.

濱村美和子・狩野鈴子・三島みどり・永島美香（2004）「在日外国人の育児の現状について（第1報）：在

日フィリピン人の母親の育児ストレスとその対処法」『島根県立看護短期大学紀要』第10号、45-52.

林恵（2017）「外国にルーツがある子どもの就学に向けた子どもと保護者への支援 ―外国人保護者への調査から―」『帝京短期大学紀要』第19号、33-42.

法務省（2020）「令和2年6月末現在における在留外国人人数について」

https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuu_kokukanri04_00018.html（閲覧日：2021年11月21日）

文部科学省（2020）「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入状況等に関する調査（平成30年度）」
https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_02.pdf（閲覧日：2021年11月17日）

和田上貴昭・乙訓稔・松田典子・渡辺治・高橋久雄・三浦修子・廣瀬優子・長谷川育代・高橋滋孝・高橋智宏・高橋紘（2018）「外国にルーツをもつ子どもの保育に関する研究」『保育科学研究』第8巻、16-23.

和田上貴昭・乙訓稔・松田典子・渡辺治・高橋久雄・三浦修子・長谷川育代・廣瀬優子・鶴田清江・高橋智宏・高橋滋孝・高橋紘・井出まゆみ（2019）「保育所における外国にルーツをもつ子どもの親支援に関する研究」『保育科学研究』第9巻、44-51.